



営農情報

「あまおう」6月の管理

第84号 令和元年6月3日

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

表1 <JA全農ふくれん実績(5月20日まで)>

※()内は前年対比

	生産者数	栽培面積	10a 当たり数量	10a 当たり金額	平均単価
JA福岡大城	285名 (100%)	64.3 ha (100%)	4,425kg (108%)	6,475 千円 (110%)	1,463 円/kg (102%)

平成30年度産は10月上中旬の乾燥と朝晩の冷え込みの影響により生育が遅れたものの、果実肥大は良好で大玉傾向の出荷開始となりました。1番果房の着果負担もあり、2番果房以降は生育のバラつきもありましたが、温暖傾向で生育も促進され、3番果房は3月下旬～4月上旬に出荷のピークを迎えました。

①年内から年始にかけ、平パックを中心に出荷量を確保できた、②3番果房から4番果房の出荷が順調に続いたことで、春先の出荷量の増加につながり、数量、平均単価ともに前年を上回る年となりました。

高収量を確保するためには、まず充実した苗の確保が重要です。令和元年度産に向け、作型に合わせ、計画的に苗づくりを行いましょ。

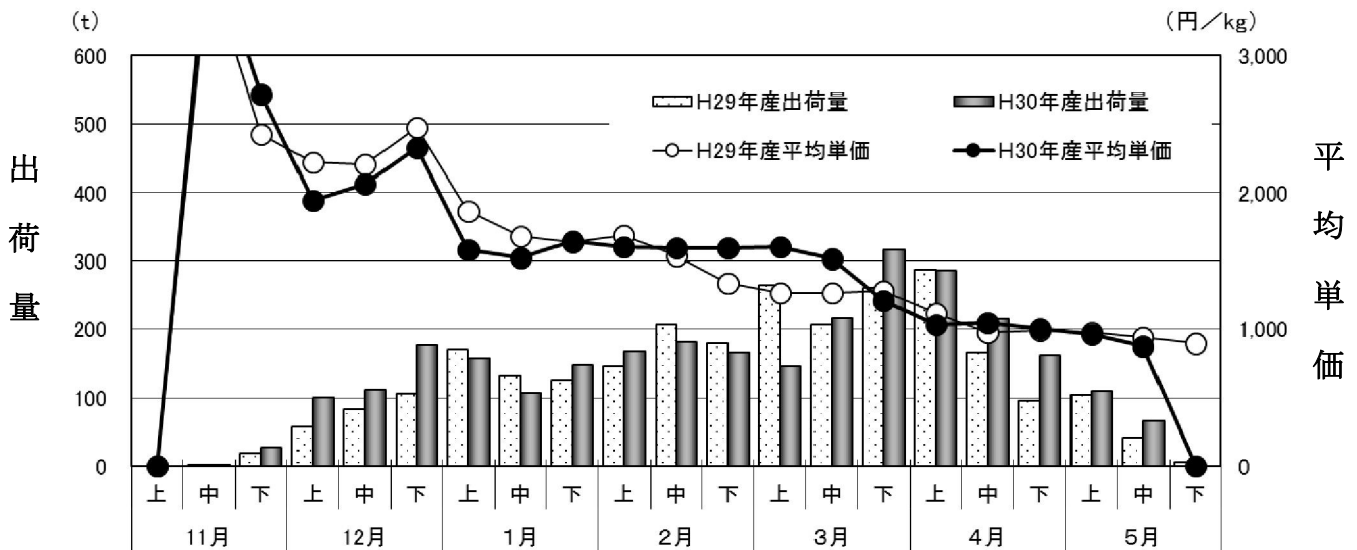


図1 JA福岡大城のイチゴ出荷量と平均単価の推移

<JA全農ふくれんデータ>

今後の管理

<育苗目標>

- ・ **クラウン径 10mm以上の良苗づくり**（収量確保）
- ・ **作型に合わせた苗づくり**（まず、作型を決めましょう）
- ・ **病害虫のない苗づくり**（炭そ病、ハダニを本ぽに持ち込まない）

今年は平年と比べて降雨が少なく、かん水不足や肥料切れによるランナーの発生が遅れているほ場もみられます。

親株からの切り離しが遅れると炭そ病に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、炭そ病対策を徹底して下さい。今年はハダニ類やアブラムシの発生が多く、うどんこ病の発生も見られます。適期防除に努めましょう。

採苗

降雨後の作業は避け、予防防除を行った後、親株から切り離しましょう！

【 さしポット 】 《目標鉢上げ時期》

8月処理開始の株冷・夜冷	⇒	6月10日まで
9月処理開始の株冷・夜冷 普通ポット	⇒	6月15日まで

- 子苗採取前に、必ず炭そ病の予防散布を行う。
- 本葉2～3枚で、3～5cm 発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
- ワラ被覆床では、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後7日程度は、黒寒冷紗（610番）等で遮光して乾燥を防止する。
- 活着するまでは、葉水程度のかん水を1日に数回行う。
- 炭そ病対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷庫内で保存する。（保存期間は3日間まで）

【 すけポット 】 《目標切り離し時期 6月中旬》

- 降雨などで硬くなった培土は、根づき（根の伸長）が悪いので、培土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、炭そ病の定期的な防除を行う（特に鉢受け作業後）。
- 培土が乾燥すると根の伸長が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除し、子苗の徒長防止と病害虫発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。
- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃（根づいた頃）を目安に行う。ただし、雨天時や苗が濡れている状態での切り離しは絶対に行わない。

切り離し後の育苗管理

【 肥培管理 】

炭そ病対策として、**窒素過多**にならない管理を徹底しましょう。

- 活着したら、追肥（置き肥）を開始する（例：花むすめ等で1～2粒/ポット）
- 活着後、2回程度液肥を施用する（例：OK-F-1で1,000～1,500倍）。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。

表2

施肥事例

対照作型	置肥（花むすめ）			最終追肥 （液肥かん注）
	1回目 （6/下）	2回目 （7/中）	3回目 （8/上）	
株冷・夜冷 （8月に低温処理 開始作型）	1～2粒	1粒	—	Ⅲ型：8月 5日 Ⅳ型：8月10日 Ⅴ型：8月15日
普通ポット等 （9月に低温処理 開始作型）	1～2粒	1粒	1粒	9月初

【 かん水 】

- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は午前中主体のかん水とし、徒長防止と炭そ病予防のため、長時間濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 愛ポットなどの小型ポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後、根が十分に回ってから開始する。
- 葉数3．5枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に炭そ病の防除を行う。

【 病虫害防除 】

炭そ病防除は初期防除が重要です。育苗期の①予防、②観察、③周辺株を含めた罹病株の廃棄を徹底しましょう！

<炭そ病>

炭そ病菌は、雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病します。

- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後に防除する。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔は確保する）。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に梅雨期）。

<うどんこ病>

うどんこ病は、病斑のある葉を在庫または定植しないことが重要です。

- うどんこ病の症状が進展する梅雨期を中心にしっかりと薬剤防除を行う。

<疫病>

梅雨時期から発生し始めるので、定期的に薬剤防除を行う。

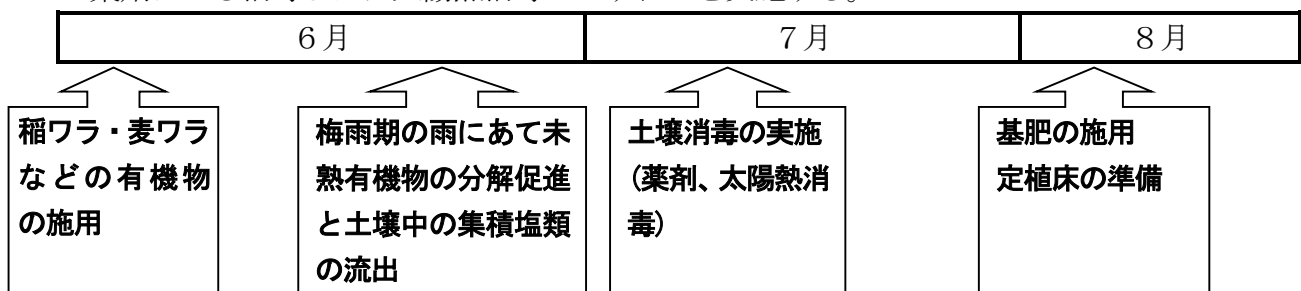
<ハダニ類>

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどなく、イチゴの栽培サイクルの中で世代交代を繰り返す。そのため、いずれかのステージ（親株・育苗・本ぼ）でハダニ類発生を断ち切ることがポイントとなる。

育苗期は葉数も少なく葉液がかかりやすいため、育苗期での防除を徹底し、本ぼに持ち込まない。

本田の土づくり・土壌消毒

- 有機物の施用
 - ▶ 1作のイチゴ栽培で消耗する土壌有機物は、堆肥約2t/10aに相当する。
 - ▶ 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。（分解促進、塩類溶脱のため）
- 土壌消毒
 - ▶ 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。



～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！